

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後七十五年 (五十九)

第二章 戦後世界のうねり…植民地時代の終焉とブロック化する世界 (二十一)

五十九 第三次中東戦争とナセルの死 (三―三)



ナセル大統領は敗戦の責任を取って六月九日夜あらゆる公職からの辞任を表明した。しかしエジプト国民のナセルに対する思いは敗戦で消えるどころか、むしろエジプトを救えるのはナセルしかないという熱意が噴出した。辞任表明の直後からカイロ市民はナセルの翻意を求め街頭に繰り出してデモ行進を始めた。真つ暗な灯火管制の中で巨大な群衆の渦が生まれた。辞任表明からわずか三時間半後、ナセルは問題を国民議会の決定に委ねるとの声明を発表した。翌十日早暁、国民議会はナセルに国家元首としてとどまるよう要請し、ナセルは大統領職を続けることになったのである。

八月、アラブ諸国はスーダンのハルツームでアラブ首脳会議を開き、三つのノー(No)と呼ばれるイスラエルに対する強硬路線を採択した。すなわち「ユダヤ人国家は承認しない」というNO、「イスラエルとは交渉しない」というNO、「そして「アラブとイスラエルの和平はNO」と言う居丈高な宣言であった。実はエジプトもヨルダンも米国を仲介役とする話し合いでイスラエルから領土を取り戻したいと願っていたが、虚勢としか言いようのないアラブ各国首脳の掛け声に押し流されたのである。

ナセルはその後三年近く大統領の座を保ったが、本人自身がレームダック（死に体）であることを最も良く理解していたに違いない。1970年8月、イスラエルとの停戦を実現すると、その翌月現職大統領のまま五十二歳の若さで心臓発作により急死したのであった。

（続く）

荒葉 一也

E-mail: Arehakahazuyal@gmail.com